

「ラストピース」

第9話

水瀬真理佳

へ登場人物一覧へ

鈴木理菜（9）（18）大学1年生

高橋湊（23）理菜のアパートの隣人

花村夏凜（18）理菜の親友

市川拓也（18）理菜の親友

西原圭吾（18）市川の友達

成宮翔（18）市川の友達

鈴木健一（41）理菜の育ての父

鈴木香澄（41）理菜の育ての母

白水透（54）バーのマスター

佐々木俊哉（45）ニュースサイトの編集長

塚目凜子（34）護身術の師範

竹内魁（20）高橋の兄

前田聡（40）理菜の実の父親

前田明日香（35）理菜の実の母親

ラリー（6）理菜が飼っていた犬

男

学生A

学生B

中年男性

○住宅街・公園の中（夕方）

バサッと中身が入ったビニール袋が地面に落ちる音。

高橋湊（23）、親友・花村夏凜（18）、市川拓也（18）が音の方を向くと、公園の入り口で立ち尽くす鈴木理菜（18）。

ビニール袋を落としたまま走り出す。

夏凜「理菜！」

と、走って追いかける。

高橋も追いかけようと一瞬動いて、やめる。

市川「これ以上理菜のこと傷つけたら、マジで許さねえから」

市川、理菜が落としたビニール袋を拾い、2人を追いかける。

公園に残された高橋、たこの滑り台に寄りかかったままズルズルと地面に座る。

高橋M「これで、良かったんだよな……」

○大通り・歩道橋（夕方）

理菜、歩道橋の階段を駆け上がる。  
手すりのそばまで行って、道路を走る  
車をボーツと見つめる。

夏凜と市川もやってきて、理菜を挟む  
ように並ぶ。

しかし何も言えない。

理菜「……ストーカー捕まえてくれたのも、  
クラブに助けに来てくれたのも、バイト誘  
ってくれたのも、長野まで送ってくれたの  
も。ゼーくんぶ、計画だったってことだよ  
ね」

と、生気がない。

夏凜「（心配そうに）理菜……」

理菜「バカだなあ私……（市川の方を向い  
て）拓也の言う通りだったね。拓也は最  
初から湊くんのこと、簡単に信用するなっ  
て言ってくれた」

理菜、泣いておらず無表情に近い。

市川、言葉に詰まる。

理菜、手すりに寄りかかる。

理菜の顔に夕陽が当たり、

理菜「（眩くように）眩し……」

と、背を向けてしゃがみ込み、膝に顔を埋める。

○アパート・正面（夜）

理菜と市川がアパートの前に着く。

理菜「送ってくれてありがとう」

市川「うん」

理菜「じゃあ、気をつけて帰ってね」

理菜、自分の部屋に向かう。

市川、その背中を見つめる。

理菜が階段を上り切ったところで、市川も階段をダンダンと音を立てながら2段飛ばしで駆け上がる。

部屋の鍵を開けようとしていた理菜、何事かと振り返る。

理菜「どうしたの」

市川、鍵を差している理菜の手を上か

ら優しく握り、鍵を抜く。

一歩前に出て理菜を抱きしめる。

理菜「ちよっ、拓也！」

理菜、市川の腕の中でもぞもぞ動くが  
びくともしない。

市川「悲しい時は泣けばいいし、辛い時は辛  
いって言うっていいんだよ。俺の前では強が  
らなくていいから」

理菜の瞳に涙が浮かぶ。

市川、理菜の後頭部をぼんぼんとする。

市川「我慢すんなよ。大丈夫だから」

理菜の目から涙が溢れる。

声は上げず、静かに鼻を吸る音だけが  
続く。

市川「しばらく母さんたちのとこ帰った方が  
いいよ。な」

理菜、涙を拭いながら、

理菜「うん……」

○鈴木家・外観

欧風、2階建ての戸建て住宅。

○同・玄関

理菜、鍵を開けて中に入る。

理菜「ただいまあ……」

反応はない。

荷物を持って部屋に上がる。

○同・ダイニング

誰もいない。

テーブルの上にはメモ。「理菜へお

昼は冷蔵庫の中に作ってあるからチン

して食べててね」と。

× × ×

理菜「いただきます」

と、スプーンでオムライスをすくうが、

スプーンを置く。

目元に滲む涙を堪えるように呼吸を整

え、勢いよく口の中にオムライスを運

ぶ。

咀嚼しながら涙が止まらない。  
嗚咽を漏らしながら食べ続ける。

○同・理菜の部屋の中

理菜、ベッドに横になりポーツと一点  
を見つめている。

※ ※ ※

（フラッシュ）

高橋「魁は無実だ。誰も殺してなんかない。

真犯人は別にいる」

※ ※ ※

理菜、スマホで一字一字ゆっくりと

「竹内魁」と入力して検索する。

画面をスクロールしていく。

段々と呼吸が浅くなりすぐに画面を消  
す。

毛布をかぶって丸くなる。

○同・外観（夜）

閉められたリビングの窓のカーテンか



ら明かりが漏れている。

○同・ダイニング（夜）

理菜の育ての父・鈴木健一（41）、母・鈴木香澄（41）、理菜でテーブルを囲む。

テーブルの上には理菜の好きな料理が並ぶ。

鈴木「理菜コレ美味しいよ。こっちは食べたか？」

鈴木、理菜の前に大皿を集める。

理菜「（苦笑して）ありがとお父さん」

香澄「もう、ゆっくり食べさせてあげてよ」

鈴木「嬉しいなあ、理菜が帰ってきてくれて」

香澄「（冗談まじりに）私と2人きりはもう

飽きたもんね？」

鈴木「そんなわけないだろ！ よし、今から

俺がどれだけ香澄のことを愛してるかゆっくり説明するからな」

香澄「あゝはいはい分かったから。私の発言

が軽率でした！」

鈴木と香澄のやりとりに笑みが溢れる  
理菜。

鈴木と香澄、それを見てホツとする。

○同・キッチン（夜）

理菜と香澄、並んで食器を洗う。

香澄が洗った皿を理菜が軽く拭き、水  
切りカゴに入れる。

香澄「ねえ理菜。デザート食べない？」

理菜「デザート？」

香澄「実はね、シュークリーム買ってきたの。  
でも2つしかないから健一には秘密ね」

理菜「うん……！」

○同・ダイニング（夜）

シュークリームを食べる理菜と香澄。

理菜、ひと口食べて、

理菜「んー！ 美味しい！」

香澄「（誇らしそうに）でしょ？ 最近でき

たお菓子屋さんなんだけど、早く理菜に食べさせたかったのー

理菜、幸せそうにシュークリームを頬張る。

香澄「（しみじみ）良かったー

理菜「え？」

香澄「ご飯食べて美味しいって感じられるならひと安心ー

理菜、咀嚼のスピードがゆっくりになり、気まずそうにする。

香澄「大学で何か嫌なことあった……？」

理菜、食べかけのシュークリームを皿に置く。

深呼吸をして、

理菜「私ね、好きになっちゃいけない人を好きになっちゃったー

と、泣きそうな笑顔を浮かべる。

香澄、予想外の答えに一瞬戸惑うが、香澄もシュークリームを置いて真剣に向きあう。

香澄「好きって気持ちでコントロールできたら、誰も恋愛で苦しまない。その気持ち自体がダメなんてことは絶対ないと私は思ってる」

理菜、下唇を噛む。

香澄「その人のこと、聞きたいな」

理菜「……初めはね、ちよつと怖い人かなって思ったの。挨拶してもそっけないし、何を考えてるか分からなくて、人といつも一線を引いてる感じがして。でも根は優しくて、ただ不器用なだけだった。困った時はいつも助けてくれて、そばにいてくれた」

香澄、誰のことか検討がつく。

香澄「素敵な人じゃない。もしかして、湊くんって人？」

理菜、頷く。

香澄「なんで湊くんを好きになっちゃダメなの？ 彼女がいる、とか？」

理菜「湊くんね、本当は竹内湊って言うの」

香澄「？」

理菜「（声を震わせて）パパとママを殺した  
……竹内魁の、弟なの」

香澄「え……」

と、固まる。

理菜「助けてくれたのも、そばにいてくれた  
のも全部、目的があったんだって……」

と、静かに涙を流す。

香澄、立ち上がって理菜を抱きしめな  
がら背中を撫でるが、香澄も放心状態。

### ○同・寝室（夜）

鈴木と香澄、ベッドに並んで座ってい  
る。

香澄は額に手を当て、鈴木は香澄の肩  
をさする。

鈴木「弟？ あの犯人の？」

香澄「そう……なんだって……」

鈴木「でもたまたま大学が一緒になるなんて、  
そんな偶然あるかな」

香澄「それが、偶然じゃないみたい。わざわ

ぎ理菜に近づいたみたいなの」

鈴木「それ、ストーカーじゃないか！ 犯罪

だよ！」

香澄「そうだよね」

鈴木「なんでそんなこと……」

香澄「お兄さんは無実で、真犯人は野放しになつてると思つてるみたい。だから、犯人はあの時殺せなかった理菜を狙いにまた現れるって……」

鈴木、呆れる。

鈴木「そりゃ、家族が犯罪を犯したら誰だつてそんなはずはないと思いたいだろうけど。

彼は法律で裁かれたんだぞ？ そんなのだの妄想だよ」

香澄「分かつてる……でも、そんなこと言われたら不安になっちゃって……きつと理菜が一番怖いと思う」

鈴木「よし。明日、その子に会いに行こう。会ってちゃんと話をしよう」

と、香澄の手を握る。

香澄「うん」

○（理菜の夢）前田家・衣装部屋（夜）

T「9年前」

コの字型に洋服がびっしりとハンガーに掛けられている。

理菜（9）、服の間に隠れて体育座り。

口を両手で押さえ、服と服の隙間から部屋のドアをじっと見つめる。

頬は涙で濡れている。

扉が開き、足音が近づいて来る。

隙間から男の横顔が見えるが、理菜の記憶では顔がはつきりしない。

男がゆっくりと理菜の方を向くと同時に、理菜はギョツと目を瞑る。

理菜M「かみさまおねがい！」

その瞬間、外でサイレンの音が聞こえる。

慌てて部屋を出ていく足音。

理菜、目を開け、おそるおそる服の間

から顔を覗かせる。

男はもういない。

理菜、気を失うように床に倒れる。

（理菜の夢おわり）

○鈴木家・理菜の部屋（深夜）

暗い部屋の中、ベッドの中で目が覚める理菜。

汗で前髪が額に張り付いている。

理菜、ホツとしたように息を吐き、部屋を出る。

14

○同・キッチン（深夜）

理菜、コップに水を入れて薬を飲む。

手元には「鈴木理菜様 頓服」と書かれた薬袋。

薬袋から出ているシートは最後の2錠まで減っている。

一息ついて、スマホで「竹内魁」と検索。



竹内魁（20）の顔写真が出て来る。

※ ※ ※

（フラッシュ）

クローゼットの方を向く男の顔。

※ ※ ※

理菜、すぐに画面を消して伏せるように置く。

電気を消して、重い足取りで部屋へ戻って行く。

○三田大学・講義室内

理菜、講義室に入ってくる。

真ん中あたりに座っている夏凜、理菜を呼ぶ。

夏凜「理菜ー！」

理菜「（元気に）おはよー！」

理菜、目の下にクマができている。

夏凜「おはよ。実家から？」

理菜「うん」

理菜、夏凜の隣に座る。

何気なく誰かを探すように講義室内を見回す。

夏凜「いないよ」

理菜「ん？」

と、とぼけて前に向き直る。

前の扉から教授が入って来て授業が始まる。

滑り込むように後ろの扉から高橋らしき男が入って来て、一番後ろの席にそっと座る。

### ○同・食堂

理菜、夏凜、市川、同級生・西原圭吾（18）、成宮翔（18）が歓談しながら食事をしている。

理菜、話に相槌を打ちながら目で誰かを探している。

市川、そんな理菜を見つめる。

理菜、市川の視線に気づいて誤魔化すような笑顔で話に戻る。

× × ×

理菜、立ち上がった、

理菜「水とってくるけど、いる人いる？」

夏凜「ありがとう大丈夫」

各々、いらないと反応。

理菜、コップを持って給水機の方へ行く。

給水機で水を入れている学生Aの背格好が高橋に似ている。

理菜、駆け寄って、

理菜「湊くん!？」

と、腕をトントンとする。

しかし振り向いた学生Aは全くの別人。

学生A「ん？ 誰？」

理菜「（しゅんとして）ごめんなさい。人違いです……」

学生A「あ、はい」

学生Bが寄ってきて、

学生B「なに？ 逆ナン？」

と、男に耳打ち。

学生A「いやあ（首を傾げる）」

学生B「でも結構ありじゃね？」

と、理菜を見る。

学生A、水を入れ終わって学生Bと会話しながら給水機から離れる。

理菜、目を覚ますように自分の頬をパチンと叩いて水を入れる。

市川がコップを持って横に現れる。

理菜「ビックリした！ さっき言ってくれれば良かったのに」

市川、水を入れながら

市川「アイツが言ってたこと気になるんだろ」

理菜「……なんのこと？」

市川「竹内湊」

理菜「……今は高橋湊だよ」

市川「アイツが竹内の弟だって認めたくない？」

理菜「そうじゃないけど……」

市川「じゃあなんだよ。理菜、アイツにストーカーされてたんだからな？」

理菜「うん……」

市川「アイツはいつまでも兄貴の事実を受け入れられないだけ。あんな話、ただの妄想だよ」

理菜「分かってるよ！ そんなことありえないって。分かってるけど……でも（呟くように）もう1回ちゃんと湊くんの話も聞きたいっていうか……」

市川「なに、なんて？」

理菜「なんでもない！」

理菜、席に戻って行く。

市川、ため息をついて追いかける。

給水機のそばのテーブルに伏せている

男。

ゆっくりと顔を上げる。

その正体は高橋。

高橋「ハッ……まったく、どこまでお人好しなんだよ」

と、手で顔を覆う。

しかしその口元は緩んでいる。

高橋 M「今の言葉だけでも救われたよ。ありがとう、理菜……」

○アパート・高橋の部屋の前（夕方）

高橋が階段を上ると部屋の前に鈴木と香澄。

鈴木「こんにちは」

高橋、軽く頭を下げる。

鈴木「高橋湊くんだよね？」

高橋「はい……」

香澄「鈴木理菜の父と母です」

高橋、動じずに、

高橋「こんにちは」

鈴木「少し話せるかな」

高橋、頷く。

○カフェ・店内（夕方）

4人がけのテーブル、鈴木と香澄の前に高橋が座る。

鈴木「単刀直入に言わせてもらおう。もう娘に

は近づかないでくれ。理菜から話は聞いた。君がやったことは歴としたストーカー行為だ。その自覚はあるのかな？」

高橋「はい。弁解するつもりはありません」

鈴木「お兄さんの：：冤罪を晴らすために、理菜のそばにいれば犯人に会えると思って近づいたというのは本当なのか？」

高橋「はい、本当です」

香澄「（感情的に）理菜はあなたのこと、いつも楽しそうに話してくれた。もし理菜がそのことを知ったらどう思うか、考えたことある!? 傷つけることになるとは思わなかった!？」

高橋、拳をギュツと握る。

鈴木「君が冤罪を信じようとそれは勝手だ。でも『犯人が狙っている』だとかそうやって理菜に不安を与えるようなことはやめてほしい。（懇願するように）はつきり言って迷惑だ」

高橋、土下座して、

高橋「本当に、申し訳ありませんでした」

周りの客や店員が高橋をチラチラ見る。

鈴木「もういい。理菜から離れてくれればそれでいい」

と、立ち上がらせる。

鈴木「突然押しかけてすまなかったね。(香

澄に)行こう」

と、伝票をとってレジに行こうとする。

高橋「いや俺が」

と、伝票をとろうとするが、

鈴木「結構だ」

と、高橋の手を制して歩いて行く。

高橋、体を曲げてお辞儀し続ける。

○バー・店内(夜)

カウンターには師範・塚目凜子(3

4)。

扉が開いて編集長・佐々木俊哉(4

5)が入ってくる。

白水「いらっしやい」



佐々木、凜子の隣に座る。

高橋、やっとカウンターに座った佐々木に気づいて、

高橋「っ……いらっしやいませ」

佐々木「湊、ウオツカ頼む」

高橋「あ、はい」

高橋、ボーツとしながら作業する。

佐々木、凜子に向かって、

佐々木「（ジェスチャーで）なんかあったのか？」

凜子、困り顔。

マスター・白水透（54）、心配そうに高橋を見て手元を二度見する。

白水「（啞然として）おい湊。何してんだ

……？」

高橋「え……？」

高橋、ロンググラスにウオツカを並々注いでいる。

佐々木「おいいゝ！ おまつ。氷も入れずに！ 俺を潰す気か!？」

高橋「あ……すいません」

凜子「じゃあ私が半分飲むよ」

凜子、高橋にグラスを渡す。

佐々木「ったく、大丈夫かよ」

高橋「（苦笑しながら）マジですいません」

高橋、氷を2つ入れたロックグラスに分ける。

白水「……理菜ちゃんとはもう話してないのか？」

高橋、一瞬動きが止まって、

高橋「（嘲笑うように）話どころか、本人の

視界に入らないようにしてますよ。ギリギリ

俺の目の届く範囲で」

編集長「へえ、相変わらず健気なもんだ」

高橋「……俺はただ、絶対に犯人を逃したくないだけです」

凜子「それは分かるけどさ、食事と睡眠は疎かにしちゃダメだよ？　なんか湊やつれた

気がする」

高橋「大丈夫。ちゃんと寝てるし食ってます

よ  
」

高橋、陽気に手でグッドマークをする  
が、表情はどこか浮かない。

○工事現場・プレハブ前（朝）

ドアが開き、中から男性たちの賑やかな  
声が聞こえる。

高橋「お疲れ様でしたー」

と、出てくる。

中年男性の声「おつかれーい。大学頑張れよ

高橋、太陽の光を眩しそうに見ながら

大きくあくびをする。

スマホで時間を確認、8..00。

高橋M「そろそろ駅着く頃か」

と、小走りする。

○大通り・歩道（朝）

高橋、小走りで大通りに突き当たる。

反対車線の歩道を歩く理菜を見つける。

高橋、ホッとするように息を吐き、理

菜と同じ方向へ歩き始める。

○同・交差点（朝）

理菜と高橋の進行方向の歩行者信号がちょうど青になり、そのまま横断歩道を歩き続ける理菜。

しかし、軽自動車が止まる気配なくスピードを出して理菜の方に走ってくる。理菜は車に全く気づいていない。

高橋、軽自動車の唸るようなエンジン音で異変に気づく。

高橋「理菜ぁーっ！」

と、叫びながら理菜の方へ走る。

理菜、高橋の方を振り向く。

高橋、理菜に向かってくる軽自動車を指差しながら、

高橋「（叫ぶ）走れー！」

理菜が後ろを振り向くと、軽自動車がスピードを出して向かってくる。

理菜「!？」

足がすくむ理菜。

軽自動車が理菜に接触するすんでのところで、高橋が理菜と一緒に歩道に飛び込む。

高橋、理菜の頭を守るように腕の中に抱きながら歩道を転がり、建物の壁にぶつかって止まる。

交差点では突っ込んだ軽自動車と車の激しい衝突音が聞こえる。

理菜がギョツとつぶっていた目を開けると、目の前には目を閉じた高橋。

理菜の頭に添えられていた高橋の手がバサリと落ちる。

理菜「湊くん……？　ねえ、湊くんってば！」

高橋はぐったり倒れたまま、頭からの出血が地面に広がって行く。

※ ※ ※

（フラッシュ）

血を流して倒れている父・前田聡（40）、母・前田明日香（35）、犬・

ラリー（6）。

※ ※ ※

理菜、広がっていく血溜まりを見て、  
顔面蒼白になる。

通行人やドライバーたちが駆け寄り、  
「おい、頭から血出てんぞ！」「早く  
救急車呼んで！」「AEDとつてく  
る！」とパニック状態。

理菜「（泣き叫びながら）ねえ、いや！ お  
願いだから返事してよ湊くん！」

理菜、高橋の頭部の傷を押さえるが、  
出血が止まらない。

（了）